

## スウィフトの生涯 (VII)

「十月クラブへの助言」執筆から  
ハーリーの失脚まで (1712 — 1714)

三 浦 謙

「十月クラブへの助言」は1712年1月に公刊された。十月クラブというのは、主に地主階級の出身で熱烈なトーリーである約200人の国会議員の結社である。メンバーはウェストミンスターのキング・ストリートにあったベル酒場に集まり、ホイッグを要路から一掃して、元ホイッグ内閣の要人を厳しく処断する方策を検討し合った。彼らにはハーリー内閣の対ホイッグ対策が手ぬるく思えた。ハーリーは偽善者、時流主義者ではないかと彼らはいぶかった。ハーリーは過激な十月クラブの動きを憂慮した。そこで、彼はスウィフトに十月クラブを教化するような論考の執筆を依頼したのである。

スウィフトは執筆に先き立って十月クラブの多くのメンバーとパブで会い、1月に原稿を書きあげてから、フォードに清書させている。スウィフトは、この論考で、トーリーよりもホイッグのほうが処罰・報償の面で積極的であり、党への忠誠心も強い。それだけに、いためつけられれば復讐の手を休めることはない。その例はいくらでも挙げることができる。したがって、十月クラブの要求通りにホイッグをすべて要路からはずして厳罰に処するような過激な手段をとれば、ハーリー内閣が瓦解してホイッグが政権を握ったさい、マリウスやローマ帝政期最後の三頭政治の頭領たちのように、ためらうことなく苛酷な手段にうったえて、トーリーの要人を断頭台に送ることになろう。目下のところはハーリーへの批判は控えて現政府に協力すべきであると説いた。僅か2ペンスのこのパンフレットは余り

売行きはよくなかったようだが、公刊後十月クラブのハーリー批判は和いだといわれている。

「ホイッグ有力貴族への書簡」は 1712 年 6 月に上梓された。ここでいうホイッグの有力貴族とはアッシュバーンハム卿<sup>(1)</sup>である。彼は裕福な貴族で 1710 年オーモンド侯<sup>(2)</sup>の息女レイディ・メアリー・バトラー<sup>(3)</sup>と結婚、1713 年にはスインク・ポーツ<sup>(4)</sup>の副領事となり、その後間もなくポートルランド伯<sup>(5)</sup>に代って第一近衛連隊の連隊長を勤めた。彼はもとはトーリィであったが、この書簡が書かれていた時点では、ホイッグに転向しかけていた。舅のオーモンド侯はアッシュバーンハムがホイッグに転ずるのを憂慮していた。だが、スウィフトの狙いはアッシュバーンハム 1 人にしぼられていたわけではない。スウィフトの意図は、上院の隠健なホイッグがその原則を曲げることなしに、アン女王およびハーリーの率いる現内閣の施策を支持できることを訴えることにあった。スウィフトはここで二つの党が反目して国を分ける場合には一国の公益はいずれかの党の私益に傾くのが普通である。シーザーとポンペイとの争いにも同じような傾があった。国益が一党の一部の指導者の野心や利害に左右されてはならないことを説いた。

「アン女王治世最後の 4 ケ年の経緯」は、これまで書いた中では最良の作とスウィフトが自負した論考で 1712 年から 1713 年にかけて執筆された。4 篇からなる大冊でこれまでのパンフレットとは異なり、れっきとした著作だが未完に終わっている。第 1 篇は 1711 年 12 月を平和条約締結への動きが急転回した時点として扱え、その背景を主に扱っている。第 2 篇は 1712 年ユトレヒトで平和条約締結の会議が開催されるまでの経緯を述べている。第 3 篇はマールボロー解任から 1712 年夏までの経過を取上げ、第 4 篇は平和会議での空虚な論議やフランダースでの同盟軍の惨敗等を通じて平和条約締結へ到った道程を論じている。

この大部の論策には「アン女王治世最後の 4 ケ年の経緯」という表題がついているが、上記各篇の概要からもわかるように、実際はスペイン戦争平和条約締結までの 16 ケ月の経過を述べているので適切なタイトルとは

いけない。それに、スウィフトが第1篇の冒頭で、

私はできるかぎり公平に調査した後に、真実もしくは真実と思われる事項を厳密に追跡する…私は現代人を教導するばかりでなく、後代の人たちにも伝達する意図のある歴史に、賛辞や諷刺を混入するつもりはない。事実をありのままに述べればそれが最上の賛辞になるし、最も永続する非難にもなるからだ<sup>(6)</sup>。

といっていることも気がかりである。たとえば4篇中最も短かい第1篇には、ハーリー内閣と対立するホイッグの有力者の特色が描き出されていて、たいへん興味深い。スウィフトの描く人物像は個人の性癖とか野心とかに傾いていて、スウィフトの偏見がかなり露骨に出ている。マールボローしかり、ゴドルフィンしかりである。マールボローは最後までスペイン継承戦争の継続を主張したが、その主なる動機は武将としての俸禄と役得であり、マールボローの栄達も権力の座からの失墜も、すべて20年以上にわたって王家の寵愛を一身に鍾め、権勢並ぶものがなかった妻サラのおかげだとしている。1711年の危機はマールボローの罷免にあった。1711年12月30日、マールボローは更迭されて、オーモンドがその後をついだ。マールボローの更迭は国の内外ではげしい非難を浴びた。強敵を相手に多年にわたって勲功目ざましい武将が戦乱が終結しないうちに罷免された例はこれまでにまずなかったからである。このマールボロー罷免への論及とその前段階での唐突な人物像はつながらない。時代の危機を生んだだけに、マールボローの全体像を描くように努めるべきだっただろう。

4代の王室に仕え、マールボローと姻戚関係にあったという有利な立場も手伝って、ついには大蔵卿にまでのし上ったゴドルフィンは、Volpone という綽名で色好みの貧慾な変節漢であったと極めつけている。ヴォルポウニはベン・ジョンソンの喜劇 *Volpone, or the Fox* <sup>(7)</sup> の主人公の名前でキツネの意味である。この芝居は、嗣子のいないヴェニスのお貴族ヴォルポウニが財産目当てに養子の口を狙う手合から逆に金品を捲き上げたり、その妻君にまでチョッカイをだしたりするが、最後には手先に使った食客

モスカに居直られて悪くみが暴露するというのはなしである。スウィフトによると、ゴドルフィンもなかなかの色好みで、ゴドルフィンが、自身嫌っていたホイッグを脱退しなかったのは、ひとえにマールボロー侯夫人サラにひかれていたためだったといっている。

こうした偏った人物論は「できるかぎり…厳密に真実を追究する」という前述の建前にはそぐわない。

また、歴史事象の叙述にさいしても、スウィフトはハーリー、ボーリングブルックその他の内部情報に頼り過ぎたといわれている。その適例は平和会議開幕にかかわる隠密行動の一件である。これはイギリスに講和の意志があることをハーリーがフランスの特使ゴールティア<sup>(8)</sup>を通じてフランスの全権大使トーシ<sup>(9)</sup>に伝えたというのが真相だが、スウィフトはトーシの方からゴールティアを通じてロンドンに書状を送り行動を開始したと書いている。

「アン女王最後の4ケ年の経緯」は上記のような欠陥とあわせてハーリー擁護の姿勢が露骨にみられたため、多年にわたって出版を抑えられ、1758年、スウィフトの死後13年を経過してようやく日の目をみた。

ところで、スウィフトがこの大冊の執筆を終えたと思われる1713年4月、イングランドで3つの主任司祭の職が空席になった。ウェルズ<sup>(10)</sup>、エリー<sup>(11)</sup>、リッチフィールド<sup>(12)</sup>という3つの管区の主任司祭である。スウィフトはムアパークにいた若い頃からイングランドでの高位の聖職者の地位を懇望していただけに期待していたが、いずれの候補者のリストにもスウィフトの名前は載らなかった。結局、ウィリアム・グラハム<sup>(13)</sup>の死によって空白となったウェルズの主任司祭にはブレイルズフォード<sup>(14)</sup>が収まり、エリーの主任司祭はチャールズ・ロデリック<sup>(15)</sup>の死後、ロバート・モッス<sup>(16)</sup>が継いだ。モッスはウィリアム3世とアンのチャップレインを勤め、後、ジョージ1世のチャップレインをも勤めた。ウィリアム・ビックス<sup>(17)</sup>の死で空席となったリッチフィールドの主任司祭は下院議長のチャップレインを勤めたジョナサン・キムバレー<sup>(18)</sup>に落着いた。

この一件は、トーリーへの尽力が並々でなかっただけに、スウィフトを

大いに失望させたが、スウィフト自身このような結末を予測していた<sup>(19)</sup>。

スウィフトが望みを達することができなかった決定的な理由は不明とされているが、ヨーク大司教、サマーセット公夫人等、スウィフトを好ましからざる人物とみるアン女王の取巻きがいぜん大きな発言権をもっていたことがスウィフトの願望を挫折させた要因の一つであろう。スウィフトはもはや女王に任命権のあるイングランドでの主任司祭の職と、女王の同意を必要とするアイルランドの主教職をあきらめざるをえなくなった。当面残されたのはアイルランド総督に任命権のあるアイルランドの主任司祭職である。スウィフト自身は1713年4月7日の「ステラへの手紙」で述べているように、アイルランドでの生活を望んではいなかったが、ダブリンの聖パトリック大聖堂の主任司祭スターン<sup>(20)</sup>がドロモア<sup>(21)</sup>の主教に昇進したあと、その後任に収まることに腹を決めた。

1713年6月1日、スウィフトはアイルランドに出立し、6月13日正式に叙任された。だが、スウィフトはダブリンで心よく迎え入れられたわけではない<sup>(22)</sup>。就任当日の朝、次のような落首が教会のゲイトに貼りつけてあったという。

本日、本寺院は著名な才人の  
主任司祭を新たに迎えた。  
彼は祈祷と不敬を常とし、  
神とマモンに仕える身である。

この主任司祭が死んだ時には、  
墓石に次の文句が刻まれるだろう。  
神に仕えた一人の人間がここに眠むる。  
だが、彼は一度たりとも天国を考える  
ことはなかった。<sup>(23)</sup>

当時のダブリンはホイッグと非国教徒の勢力が強かった。ホイッグはスウィフトを不実な離党者として罵倒し、非国教徒はスウィフトの掲げる国

教会の原則を嫌悪した。スウィフトはアイルランドに着いて早々、宿痾である目まいとつんぼに悩まされたことも手伝って、2週間でダブリンの生活に嫌気がさし、ララカーでの佗住居を好むようになった。1713年7月8日付のヴァネッサ<sup>(24)</sup>への手紙で、スウィフトは次のように述べている。

こちらへ来て早々やりきれない思いをしています。…ですが、  
ここのところ、憂うつな気分も失せてきて、こんどは、なまくら  
になってきました。でも、川沿いの散歩道はとても気持ちいいし、  
堀割はたいへんきれいで、鰻が泳いでいます…国務に干渉するよ  
りは柳の面倒を見たり、生垣の手入れをするほうが、今の私には  
向いています<sup>(25)</sup>。

ヴァネッサというのは、ダブリンに定住したオランダ人の商人で1697年ダブリン市長にまでなったバーソロミュー・ファンホームリッフ<sup>(26)</sup>の長女である。彼女には妹が一人と男のきょうだいが2人あった。スウィフトがヴァネッサを知るようになったのは1707年から1709年にかけてのロンドン滞在中のことである。その後、トーリーのために積極的にパンフレットの執筆を始めるようになると、スウィフトはヴァネッサの家を根城として使うようになり、2人の友情は確かなものとなった。だが、1713年6月、聖パトリック大聖堂の主任司祭としてスウィフトがダブリンに赴く頃から、ヴァネッサの側に変化がみられるようになった。同年6月前後、ヴァネッサはスウィフトに頻繁に手紙を出してつんぼと目まいの発作を気づかっている。こうした健康への配慮がスウィフトへの情愛につながる節はあった。6月30日のスウィフトへの手紙は、まるで恋人の病状を気づかうような文面である。ヴァネッサはステラよりも7歳年下で、スウィフトが始めてヴァネッサを見知った時、ヴァネッサは20歳、スウィフトは44歳であったが、この手紙はとてもそのような年齢差を感じさせない。ヴァネッサはここで、ひたすらスウィフトの健康を案じ、身が細る思いで心配している「この私」のことをどうか忘れないでほしいと願っている。スウィフトとヴァネッサのその後の成行は章を改めて述べる。

ちょうどこの頃、スウィフトにロンドンから呼び出しがかかった。トリーの大黒柱であるハーリーとボーリンブルックの不和が嵩じて政務が支障しがちなので、スウィフトに2人の仲をとりなしてほしいという依頼だった。調停役として2人に昵懇なスウィフトが最も適任とみた上での呼び出しだった。ハーリー内閣誕生後、半年ほどして2人の間の不和が目立ち始めていた。敵にも味方にも2人の対立は明らかだった。ハーリーは隠密行動を好んで決断をしぶり、閣僚が対外的に余り表面に出ることを好まなかった。ボーリングブルックは活動的で苦難も栄誉も共にわかちあうことを望んだ。知友から合せて百通近い調停依頼の手紙を受け取ったスウィフトがロンドンに着いた時、2人の仲は破局寸前に達していた。スウィフトはセント・ジェームズ宮の近くにあったマーシャム卿<sup>(27)</sup>の邸へ2人を何度なく連れて行き、腹うちわって3人で話し合ったが和解に達することはなかった。アン女王が死ぬ1714年の5月、同じマーシャム卿の屋敷での最後の3者会談のさい、ボーリンブルックはスウィフトに低い声で「私は正しかった」と明言した。ところが、明確な態度は避けたがるハーリーは「これからさき、万事うまくゆくと思う」という曖昧な返事で終わったという<sup>(28)</sup>。

スウィフトは調停には失敗したが、この時期ハーリーとの親密度を一段と深めてゆく。スウィフトはボーリンブルックよりもハーリーに好意を抱いていた。ハーリーがホイッグの刺客ギスカル<sup>(29)</sup>に狙われて、あやうく一命をとりとめたことがあった。連絡をうけたスウィフトは肉親の兄弟が危害をうけたように歎き悲しんだ。その折ハーリーを傷つけたペルナイフをスウィフトは自身の臨終の日までハーリーの遺品として所持していた。ペルナイフは柄が鼈甲で、刃が収まっている時には成人した男の小指ぐらいの大きさだった。

スウィフトは公人としてのハーリーには、しばしば腹を立たされたが、私人としてのハーリーには腹立たしい思いをすることはなかった。それだけに、ハーリーの息女で美貌で賢女の誉れ高かったカーマーセン侯爵夫人が1713年11月28歳の若さで病死した時には、次のような心からなる追

悼文を父親のハーリーに送ってその死を惜しんでいる。

かかるご令嬢を亡くされた閣下、かかる友人を失くしたわれわれ、かかる規範を失くした世間の人たちは、それぞれ、これまでのいかなる私人の死よりも悲しむ大きないわれがあります。閣下、私は女性の気質の中に入る好ましい美点を一つ一つ、じっくり考えますが、人間がもちうる最高の形でご令嬢がもちあわせていない美点をなに一つ選びだすことができなかったからです<sup>(30)</sup>。

そして、夭折した娘を悲しむ父親の心情を思いやり、次のような言葉をもって追悼文の結びとしている。

閣下、私がなぜあなたさまにお便りを書くのか、また、なにを書いているのか、私にはわからない有様で、作法にしたがって書いているわけではありませんし、閣下に安らぎを与えることができると書いて書いているわけでもありません。なにか申し上げなければいけないという、いたたまれない気持ちからだと思うのですが、書いたものをお送りすべきかどうか、今だに迷っている仕未です<sup>(31)</sup>。

サー・ウォルター・スコットはスウィフトのこの手紙を英語で書かれた最も美しい追悼文として激賞している。

ところで、ハーリーとボーリンブルックとの確執が激しかった 1713 年はホイッグとトーリーとの反目が熾烈を極めた年でもあった。ホイッグはスチュアート家の王位継承権を主張するエドワード<sup>(32)</sup>呼び戻しの策を計っているとしてトーリーを非難し、トーリーはホイッグの政策は王位と憲法と国教会を危くするといってやり返した。それに、1713 年末にはアン女王の病状が思わしくなくて、スチュアート家再興の噂と共にフランスの艦隻がイギリスを侵寇するのではないかという不穏な空気がただよっていた。文字通りの危機だった。

このような情勢下で、翌年の 1714 年スウィフトは「ホイッグ党の公共精



神」<sup>(33)</sup>を執筆してホイッグを攻撃した。スウィフトは再び政争に介入したのである。このさいスウィフトはスコットランド人を「貧しくて獰猛な北方民族」と罵倒し、スコットランドとの統合によってイングランドに貧乏貴族が入ってきただけだと嘲けた。スウィフトはスコットランド人を嫌っていた。彼はスコットランド人を非国教徒の中で最も危険な存在とみなし、スコットランド系が主流を占めるアイルランド長老派教会を激しく敵視していた。したがって、18世紀最大の政治成果といわれるイングランドとスコットランドとの連合(1707年)をスウィフトは白眼視した。この連合はイギリス国教会を反キリストの顕現とみる宗派を国家が容認することになるというのがその理由だった。

このパンフレットは発刊後間もなく5版を重ねた。アーガイル公爵<sup>(34)</sup>率いるホイッグのスコットランド系貴族はこのパンフレットに激怒した。彼らはアン女王に関係者を処罰するように訴えた。その結果、執筆者を明らかにした者には300ポンドの懸賞金を出すという布告が出た。スウィフトの首に300ポンドの懸賞金がかかったのである。出版業者のモーフェー<sup>(35)</sup>と印刷業者のバーバー<sup>(36)</sup>は逮捕された。スウィフトは逃亡を企てたが、ハーリーの尽力により、なんとか嵐は静まり告訴は取り下げられた。

こうした政争の中にあって、スウィフトの慰めの一つは医者アーバスノット<sup>(37)</sup>や、ポープやゲイ<sup>(38)</sup>といった文人との付き合いだった。1713年末にできたスクリブラーラス・クラブ<sup>(39)</sup>は彼らの結社である。間もなく詩人パーネル<sup>(40)</sup>が加わり、ハーリーもクラブの趣旨に賛同して時おり顔をみせた。スクリブラーラスというクラブ名はポープの発案でこの結社が出した「マルチナス・スクリブラーラスの思い出」<sup>(41)</sup>という回顧録の表題からとった。マルチナス・スクリブラーラスは英語風に読みかえるとマーチン・ザ・スクリブラー(三文文士マーチン)ということになる。このクラブの中心人物はアーバスノットで彼が1709年以来女王つきの宮廷医をしていた関係から、セント・ジェームズ宮内のアーバスノットの寓居が彼らの溜り場になった。アーバスノットは当時の傑出した医者であったばかりでなく才気ある文人でもあった。

回顧録「マルチナス・スクリブラーラスの思い出」はポープ、スウィフト、ゲイ、パーネル、アーバスノットという5人のスクリブラーリアンの共同成果で、まとめ役はアーバスノットであった。このさい、アーバスノットの役割がいかに大きかったかは、1714年7月3日付のアーバスノットへ宛たスウィフトの手紙でもわかる。この中で、スウィフトは次のようにいっている。

あなた以外の人の手になるマーチンを話題にすることは愚かです。あなたは私たちが1年かかっても出せないような素晴らしいヒントを毎日出してくれます…それに科学にかかわるところの出所はすべて間違いなくあなたでしょう<sup>(42)</sup>。

この回顧録の狙いはペダンティックな哲学者や教育家や批評家を愚弄することにあった。したがって、主人公マーチンを、まず、いかにも術学者らしく仕立てあげている。

母親が角製の大きなインキ壺を夢見た翌日、セント・ジャイルズの貧民街で飛び交うスズメバチに一刺も刺されることなく誕生したマーチンは後年大学者になる卦の持主である。大きなインキ壺は後日著わす大部の著作を暗示していると父親は解釈した。それに、生まれた赤子マーチンは多くの先哲の肉体上の欠陥を身につけていた。キケロの<sup>いぼ</sup>疣、アレキサンダー大王のねじれた首、マリウス<sup>(43)</sup>の腫れ上った肢。これを見た父親は、息子は将来デモステネス<sup>(44)</sup>のような吃音になるだろうとあって喜ぶ。

このマーチンが成人して4つの航海に出る。愛妻リンダミラ<sup>(45)</sup>を亡くした悲しみを紛らすためだった。最初の航海では、嵐に遭い漂着した島で古代ピグミー王国の遺跡を発見する。2回目の航海では巨人国に赴き、住民の人徳の高さにうたれる。3回目の航海では、万事を数学で統治する哲学者の国を訪ねる。数学好きのマーチンはこの施策が悦に入り同じ統治方法を帰国してから自国に適用しようとするがアン女王の側近に嫌われて阻止される。最後の4回目の行先不明の航海では、人間嫌悪に通ずる激しい憂うつ症にかかり、マーチン自身が発見した国をイングランドに帰属させな

いため、報告書の提出は控えることにする。スクリブラーラス・クラブはこの4つの航海をあらためて肉付することはなかったが、この航海は部分的にスウィフトの後年の大作『ガリバー旅行記』の下地になったといわれている。だが、この回顧録が活字になったのは1741年で、ポープ全集の第2巻に収められて初めて世に出た。しかも、そのさいポープが全篇にわたって手を加えたようなので、この回顧録と『ガリバー旅行記』との決定的な結びつきは今日不明である。

スクリブラーラス・クラブのめぼしい活動は1713年の冬と翌年の春の数ヶ月間で長くは続かなかった。1714年の6月頃から会合は途切れがちになった。アーバスノットはアン女王の治療と看護に専念するようになり、ポープは『イリアッド』の翻訳<sup>(46)</sup>に没頭した。ハーリーはボーリンブルックとの葛藤が深まる一方で政務に忙殺された。こうして、1714年8月のアン女王の死後、会合は全く開かれなくなった。だが、短期間とはいえ18世紀初頭に政治を度外視して息の合った医者と文人と牧師と政治家が寄り集って諧謔をたのしみ、後代に伝わる秀作<sup>(47)</sup>の礎地を作った点で、スクリブラーラス・クラブの活動ははなはだ興味深い。

ところで、ハーリーとボーリンブルックとの調停に失敗して疲れ果てたスウィフトはロンドンに見切りをつけてオックフォード経由でバークシャーのレットコムへ引きこもる。レットコムにはファーンハム時代からのスウィフトの友人である牧師ジョン・ゲリー<sup>(48)</sup>の居宅があり、スウィフトの来訪を待っていた。スウィフトは6箱の本をダブリンへ送ってから、1714年5月末日ロンドンを立ってレットコムへ向う。スウィフトはレットコムに、ちょうど2ヶ月半滞在してからアイルランドにもどるが、このレットコム滞在は後年のスウィフトにとって大きな意味があった。

スウィフトは同年6月11日友人ウオールズ<sup>(49)</sup>に宛て政治と決別の意志を次のように伝えている。

ご無沙汰しております。私は目下田舎にひっこんでいます。王宮や権臣どもや政治にはウンザリしました。できることなら、夏

が終る頃にはアイルランドにもどりたいと思っています。ここにいる間に片づけなければならない書類がかなりあるので、それ以前は無理だと思います。私はロンドンを去るという踏ん切りをつけるのに 6 週間かかりました。…私は脱出の機会があるときに、救出のための手のうちようがない船中に留まって嵐にもまれる気はありません。私はこれまでさんざんいやな思いをさせられましたし、危険な目にも遭ってきました。これからはできるだけ静かに暮したいと思っています。政治はもうたくさんです<sup>(50)</sup>。

多弁なロンドンの友人とは違って口数の少ないゲーリーの家に居候したスウィフトは、これまでとは全く違った日程を消化していた。朝 6 時には起き夜 10 時には床にはいった。午後遅かったり早かったりしたディナーは、きまって 12 時から 1 時の間にとった。夕食はパンとバターとエールで 8 時にとり、エールは 2 人で一晩 1 パイントという少量だった。

レトコムでスウィフトが安穏な生活を送っていた間に、ロンドンではボーリンブルックの勢力が増大し、ハーリーの失脚が間近に迫っていた。ボーリンブルック台頭の一例はボーリンブルックが出した「教会分離法案<sup>(51)</sup>」である。これは非国教徒にたいするハーリーの穏健な対策にあきたらないボーリンブルックの強硬策で、国教会の儀式に従って国教宣誓を行わない学校の教師には教師としての職務を停止させるという厳しい法案だった。この法案は上院での 3 回目の審議で可決され 1714 年 8 月 1 日から実施される運びとなった。スウィフトも非国教徒は好まなかったが、この苛酷な法案がハーリーの破滅を早めることを憂慮した。

6 月 8 日ハーリーはアン女王に覚書を提出していた。これまでの大蔵卿<sup>(52)</sup>としての精励ぶりをあらためて文字に表わして、ややもすれば離れがちな女王の目をハーリーに向けさせるためだった。ボーリンブルックの勢力が高まってゆく中で、ハーリーはなお大蔵卿の地位に未練があった。

7 月 27 日ついにハーリー内閣終焉の日がきた。ハーリーとボーリンブルックは女王に謁見し不穏な空気の中で三者協議の末、夜の 9 時前後、

ハーリーは女王から罷免を言い渡された。ハーリーの辞職後、だれが事態を收拾するかは即座に決まらなかった。ハーリーを倒しはしたもののボーリングブルックが大蔵卿の地位に就いたわけではない。

トーリー内部の紛争は病弱なアン女王の死期を早めた。アン女王は病床でだれを信じてよいかわからぬと側近にもらしていた。7月29日アン女王は危篤状態に陥った。放血しても激しい頭痛は収まらず昏睡状態が続いた。オーモンド侯夫人が使者を立てて、ケンジントン宮殿に重臣を召喚した。直ちに王宮内で秘密会議が開かれ、シュルーズベリー侯が大蔵卿に推挙された。ボーリングブルックは排除されたのである。アン女王は8月1日の日曜日午前7時ほとんど無意識のまま息をひきとった。50年の心労の多い生涯だった。実務に長けた周倒な政務家であるルイスはアン女王の生命の糸が絶たれたと同時に旧体制のトーリーの天下は終わったと感じとった。3年前ハーリーに喝采を送った同じ群衆がこんどは踵を返してハーリーを野次った。

アン女王の死後間もなくジョージ一世が即位しホイッグが天下を取るとホイッグはハーリーを糾弾してロンドン塔に幽閉した。ボーリングブルックは難を逃れてフランスへ逃亡した。ボーリングブルックとハーリーとの確執はハーリー内閣の瓦解を早めただけだった。レトコムに穩棲中のスウィフトはトーリーの敗北を認めて、8月16日アイルランドへ戻った。

### 注

- (1) Ashburnham, John, 1st Earl of, (1687—1737).
- (2) Ormonde, James Butler, 2nd Duke of, (1610—88).
- (3) Lady Mary Butler (c. 1690—1713). 結婚後3年で病没。スウィフトお気に入りの女性の1人だった。
- (4) the Cinque Ports イングランド南東部にある Dover, Hastings, Hythe, Romney, Sandwich の5港。国防上特権が与えられていた。
- (5) Portland, William Henry Bentinck, 2nd Earl of, (1682—1726).
- (6) Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. VII. pp. 1—2.
- (7) [volpóuni] と発音する。Ben Jonson の諷刺喜劇の中では最もすぐれた作品

とされている。

- (8) Gaultier, François (d. 1720). フランスの僧侶で外交官。
- (9) Torcy, Jean Baptiste Colbert, marquis de (1665—1746). フランスの政治家。ルイ 14 世の秘書官も勤めた。
- (10) Wells.
- (11) Ely.
- (12) Lichfield.
- (13) William Graham.
- (14) Dr. Brailsford.
- (15) Charles Roderick.
- (16) Robert Mosse.
- (17) William Binckes.
- (18) Jonathan Kimberley.
- (19) 1713 年 4 月 7 日付の *Journal to Stella* で、スウィフトは次のようにいっている。

This Morning My Friend Mr. Lewis came to me, and shewed me an Order for a Warrant for the 3 vacant Deaneries, but none of them to me; this was what I always foresaw.
- (20) John Stearne (1660—1745).
- (21) Dromore.
- (22) スウィフトの伝記作者の 1 人 Lord Orrery は、上層の市民はスウィフトを避け、下層の市民はスウィフトを野次ったり、スウィフトに石を投げつけたりしたといっている。
- (23) *Swiftiana* II, pp. 33—4.
- (24) Vanessa. (1687—1723) Esther (or Hester) Vanhomrigh が本名。Vanessa という愛称は Vanhomrigh の Van と Esther をあらかず Hussy を合わせて作った。
- (25) Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. 1, p. 373.
- (26) Bartholomew Vanhomrigh (d. 1703).
- (27) Samuel Masham, Lord Masham of Otes (c. 1679—1758). アン女王の腹心であった Lady Masham の夫君。
- (28) Sir Walter Scott, *Memoirs of Jonathan Swift, D. D.*, p. 202.
- (29) Antoine, the Marquis de Guiscard (1658—1711). スウィフトは *Memoirs, Relating to that Change Which Happened in the Queen's Ministry in the Year 1710* の中で、ギスカルは Namur (ベルギー南部の州) の州知事であったギスカル伯の舎弟だが、家名を汚す無信仰の放埒者であったといい、刃傷沙汰におよんだ当時の模様を次のように描いている。

(1710年3月8日秘密情報をフランスに流したかどでハーリーの命によりギスカルは捕えられた。上院の査問委員会の席上で、証拠物件であるギスカル自筆の手紙をハーリーが指し示すと、ギスカルはやにわにハーリーの背後に廻り、ポケットにしのばせていたペルナイフでハーリーの胸部を刺した。ペルナイフは剣形軟骨にあたったか厚手のチョッキに阻まれたかして、刃が柄の近くで折れてしまった。ギスカルは取り押さえられその場でうけた傷害がもとで数日後死んだ。ハーリーは運よく一命はとりとめたが、回復にはかなり時間がかかった)

③① 1713年11月21日付ハーリーへの書翰.

*The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. I, pp. 405—6.

③② James Francis Edward Stuart (1688—1766). James 二世の子. スチュアート家再興のため王位継承権を主張して1715年に乱を起したが敗れた. 通称 the Old Pretender. ジャコバイトは彼を James 三世と称したがハノーバー家支持者からは「王の名を僭する者」(pretender) といわれた.

③③ *Publick Spirit of the Whigs: Set Forth in Their Generous Encouragement of the Author of the Crisis*.

③④ Archibald Campbell, 2nd Duke of Argyll (1680—1743).

③⑤ John Morphew (1706—20).

③⑥ John Barber (1675—1741).

③⑦ Dr. John Arbuthnot (1667—1735).

③⑧ John Gay (1685—1732).

詩人, 劇作家. 代表作 *The Beggar's Opera* (1728) は当時の政界や世態を諷刺した音楽喜劇でロンドンで2シーズン続演された. 第一次世界大戦中に再演され, 1463回という記録的な上演回数を残した. ゲイは死後 Westminster Abbey に葬られた.

③⑨ Scriblerus Club.

④① Thomas Parnell (1679—1718).

アイルランド生まれの牧師, 詩人. Pope の *Iliad* 翻訳を助け, その出版にさいして *Essay on Homer* を序文として添えた. 彼の詩は厳しい倫理感と流麗な語法を特色とする. その詩集 *The Hermit* (1721), *A Night-Piece on Death* (1721) は彼の死後, ポープによって編集, 出版された.

④② *Memoirs of Martinus Scriblerus*

④③ *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. II, p. 46.

④④ Gaius Marius (155—86 B. C.). ローマの将軍, 執政官.

④⑤ Demosthenes (384?—322 B. C.).

Athens の雄弁家, 政治家.

④⑥ Lindamira.

- (46) 1713 年から Homer の翻訳に着手し, *Iliad* は 1715 年から 1720 年, *Odyssey* は 1725 年から 1726 年にかけて出版された. ポープはこの翻訳で約 9,000 ポンドの収入を得たといわれている.
- (47) アーバスノットの *Three Hours after Marriage* (1717), スウィフトの *Gulliver's Travels* (1726), ポープの *Dunciad* (1728 et seq) はスクリブラーラス・クラブでのそれぞれの活動が基礎になっている.
- (48) John Gere (d. 1761).  
Letcombe Bassett の教区牧師.
- (49) Thomas Walls, Archdeacon of Achonry (c. 1672 –1750).
- (50) *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. II, p. 30.
- (51) The Schism Bill.
- (52) イギリスではウィリアム一世 (在位 1066 – 87) からアン女王 (在位 1702 – 14) までが大蔵卿 (Lord Treasurer), ジョージ一世 (在位 1714 – 27) からエドワード七世 (在位 1901 – 10) までは大蔵総裁 (First Lord of Treasury) が閣議を主宰した. プライム・ミニスターが首相の正式の官職名になったのはエドワード七世治世中の 1907 年以降である.

### 主要参考文献

- Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).
- Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).
- Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D. D.* (Edinburgh, 1824).
- Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).
- Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).
- Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).